日本の中等教育での英語ディベート指導

― 指導の意義と実践上の課題 ―

東京学芸大学　言語文化系教育講座　２年　小林良裕（R21-4003）

キーワード：英語ディベート，教材開発，リフレーミング

【研究全体の目的】

2000 年代の文科省の SELHi 事業を契機に全国の中高で指導が活発化した英語ディベート活動は、2022 年度から実施された新学習指導要領内での推奨も受け、生徒がより一般的に授業内で取り組むべき取り組みとして受け入れられつつある。この英語ディベート活動の現状での課題を整理し、あらためて日本の中高の学校教育内での役割を再考することが研究の目的である。

【昨年度までの研究成果】

（1）指導実践・教材開発

[部活動] 主に関東圏の中高の教員と協力し、即興型英語ディベートの普及を目的として一般社団法人（日本高校生パーラメンタリーディベート連盟, HPDU）を設立し、念に数回全国規模の高校生大会を開催してる。

[授業内での活動] 修士論文に代わる「特定の課題についての研究の成果」として、高校授業用の英語ディベート教材集を作成した。また、中高生向けの英語ディベート指導の類型化を試み、小論として英語教員向けの専門誌に寄稿をした(小林, 2020)。

（2）指導上の課題を解決するための実証研究

[論題について] 英語ディベートの論題と、ジャッジングについて調査を行った。高校生向けの即興型英語ディベート大会で用いられた論題で、肯定側または否定側で勝敗率に著しい差があったものの特徴を分析し、授業で用いるディベートのトピック選定において考慮すべき点を明らかにした（小林, 2022a）。

[ジャッジングについて] また、生徒自身が授業内で審判役を務める場合の困難点を探るために、即興型英語ディベート全国大会のジャッジングの実際を調査し、経験を積んだジャッジ間で判断が異なった原因を調べ、授業内で生徒にジャッジ役を務めさせる場合の留意点を、論題の解釈という点から考察した。（小林, 2021）

【本年度の研究状況】

（1）指導上の課題を解決するための実証研究

ディベート的活動を英語の授業内で行う意義について検討するため、その教材としての特性と指導効果について、以下の３点に注目して実証的研究を行っている。

① リスニングとライティング統合型課題としての特性
② 事実と意見の識別に注目をした質問活動
③「方法・政策」について説明する無生物主語構文の使用

（2）指導実践・教材開発

[日本語の教材] 日本の中高生用に作成した即興型英語ディベートのテキストを、英語科以外の教員が利用できるように、日本語ベースの教材に作成し直し、一般に公開した（小林, 2022b）。

[ディベートを通して学んだ知識のその他の場面への応用]

英語ディベート関連の教材といえば、試合のフォーマットを説明したルールブックか、実際に英語ディベートを練習するための教材である。実践者の視点から、ディベートの練習の本質として、以下の３点に注目している。

① 物事を理解するには複数の視点があること。
② 話し合いの場面では、自分の意見を言うこと以上に相手の意見を聞くことが大切ともなること。
③ 合意形成のためには、相手との気持ちのつながりも必要であること。

【研究成果の一例】

本年度取り組んでいる指導実践・教材開発として、上記のうち「①物事を理解するには複数の視点があること」をディベート活動以外の場面での応用を促すため、進路ガイダンス的内容を含めた高校生用の教材を作成した。教材の構成は以下の通りである。

A. 自身の性格についてのリフレーミング活動
B. 簡易的な性格診断テストによる内省の促し
C. 問題解決型スピーチでの志望理由書
D. ディベートの論題を通しての複数の視点共有

【引用文献】

小林良裕 (2022a). 「即興型高校生英語ディベート大会における論題の公平性についての探求」『ディベートと議論教育―ディベート教育国際研究会論集』4, 2-19.

小林良裕 (2022b)『日本語 即興型ディベート』 S.A.D.ワークス.

小林良裕 (2021). 「即興型英語ディベートでのジャッジ間の評価の違い：高校生全国大会決勝の事例分析から」『ディベートと議論教育―ディベート教育国際研究会論集』3, 35-50.

小林良裕 (2020). 「高校での英語ディベート指導: 10 年間の総括」『英語教育』,68(12), 36-37.